仙台市文化財調査報告書第27集

史跡陸奥国分寺跡

昭和55年度環境整備予備調査概報

東門跡

昭和56年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第27集

史跡陸奥国分寺跡

昭和55年度環境整備予備調査概報

東門跡

昭和56年3月

仙台市教育委員会

序

陸奥国分寺跡は、大正11年に国の史跡指定を受けた後、昭和30～34年には陸奥国分寺跡調査委員により、調査動員延約 4,000人をもって、国分寺跡の発掘調査としては全国でも他に例をみない程の大規模な調査が行なわれています。この調査の成果としては14棟もの建物跡の発見をはじめ、陸奥国分寺跡の規模と伽藍配置が正確に把握されるなど、全国の国分寺研究に大きな貢献をとげる調査となりました。このことはまた、古代東北が辺境とされていた陸奥国にあって、これ程の規模と壮大な伽藍配置を有していたという認知は、いかに陸奥の地が重要であり、かつその統括に力が注がれたかを物語るものでありました。

仙台市教育委員会はこれを受けて、その度多くの方々の協力を得ながら公有化を進め、漸次史跡の保存整備を進めております。

本書は、史跡保存整備事業の一貫として実施している調査の、本年度は東門跡の規模を構築方法の確認を行うための国庫補助事業による調査報告であります。

今後も漸次、環境整備のための調査を継続し、将来は一大史跡公園に整備を行い、仙台市の重要な文化遺産として、永く後世に継承するべく鋭意努力して行く所存であります。

最後に、本書が今後の文化財保護保存のための普及、啓蒙そして愛護心の高揚に寄与することを願ってやみません。

仙台市教育委員会

教育長　藤　井　　黎

例　　言

1．本書は国庫補助事業（総額 5,000,000円）の環境整備事業に伴う、史跡陸奥国分寺（僧寺）の東門跡の発掘調査概報である。

2．本書は、調査の経過と調査概要の記載を主とし、これに東門についての若干の考察を加えたものである。

3．調査にあたっては、東北大学名誉教授伊東信雄氏、東北大学工学部助教授坂田泉氏の御指導をいただいた。

4．本書の執筆、編集は工藤哲司が担当した。

5．土色は、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人・日本色彩研究所色票監修新版標準土色帖を使用した。

6．地形図は建設省国土地理院発行の５万分の１「仙台」を使用した。

7．本調査は、昭和55年７月に着手し、昭和56年３月31日に全ての事業を終了した。

本　文　目　次

Ⅰ．東門跡発掘調査要項…… 1
Ⅱ．遺跡の位置と環境 …… 2
Ⅲ．調査に至る経過 …… 2
Ⅳ．調査概要 …… 3
　1．基本層序 …… 3
　2．東門跡 …… 3
　3．築　地 …… 8
　4．外囲溝 …… 9
　5．掘立柱建物跡 …… 11
　6．土　壙 …… 12
　7．　溝 …… 12
　8．近世墓壙 …… 12
Ⅴ．出土遺物 …… 15
　1．　瓦 …… 15
　2．土　器 …… 16
　3．その他の出土遺物 …… 17
Ⅶ．まとめと考案 …… 17
　1．調査成果のまとめと考察 …… 17
　2．環境整備のための東門跡の復元について …… 19

Ⅰ．東門跡発掘調査要項

調査目的　東門跡一帯の環境整備に先行し、東門の位置、範囲、保存状況、関連施設の調査を目的とする。

調査面積　約 400㎡（仙台市木ノ下三丁目81）

調査期間　昭和55年７月８日～９月19日

調査体制

調査主体　仙台市教育委員会

調査担当　仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係

（課長）永野昌一、（主幹）早坂春一　（係長）鈴木昭三郎　（主査）鈴木高文　（主事）工藤哲司、金森安孝、（教諭）青沼一民

調査指導　伊東信雄（仙台市文化財保護委員、陸奥国分寺跡調査整備審議会委員、東北学院大学教授）

坂田泉（陸奥国分寺跡調査整備審議会委員、東北大学助教授）

調査補助員　森剛男

調査参加者　小林広美　真山尚幸　石本敬　高橋学　沢畑俊明　渡辺浩一　池田俊也　柏　実　藤田淳　及川茂

II．遺跡の位置と環境

陸奥国分寺跡は仙台駅の東南約 2.5km、国府多賀城から南へ10km離れた、仙台市木ノ下にある。ここは広瀬川によって形成された仙台市街地の河岸段丘最下段である下町段丘の直下、海岸平野最奥部にあたり、標高は16m から17m ある。周辺一帯は、歌枕にも著名な「宮城野」の地であり、十数年前までは田畑も広く残されていたが、現在は仙台市東南部の市街地の一角となっている。

市街化が進んだ同寺跡周辺地域でも遺跡はまだ多く残されており、国分寺の歴史的環境を形成している。まず南方には古墳時代中期の遠見塚古墳、後期の法領塚古墳、弥生時代以来の集落跡の南小泉遺跡がある。東には仙台市東郊条里跡、西には向山横穴群がある。そして北の丘陵地帯には、国分寺跡や多賀城跡に瓦を供給した台ノ原・小田原古窯跡群が広がっている。

III．調査に至る経過

陸奥国分寺跡は大正11年史跡に指定されて以来、多年にわたり調査が行なわれて来たが、これを性格別にみると、学術調査、環境整備事業の予備調査、現状変更許可申請に伴う事前調査があり、それぞれ表１のように行なわれて来た。

一連の調査のなかでは、やはり第一次より第五次までの学術調査の果した役割が大きく、この間の調査によって、陸奥国分寺は 800尺（約 242m ）四方の寺域を有し、周囲には築地、門、掘立柱列、溝などが確認され、南北中心線上に南大門、中門、金堂、講堂、僧坊を置き、金堂と中門を廻廊で結び、金堂と講堂の間の東西に鐘楼、経楼を、金堂の真東に七重の塔を配し、塔にも廻廊をめぐらすという伽藍配置をとることが明らかになった。しかし、昭和47年以降、環境整備事業を実施するにあたり、昭和30～34年の調査成果を復元設計の基礎資料とするだけでは不十分な点が多かったため、従来の調査成果を補足する意味での予備調査が行なわれ、本

年度は東門とこれに関係する遺構確認の調査を行なうことになった。

本調査においては、昭和33年の調査によって想定された八脚門を被うように、東西30m 、南北15m の方形を基本としてトレンチを設定したが、樹木や建造物の制約により図のような形になった。

表－1　陸奥国分寺跡発掘調査略歴

年　度	調　査　区　別	発　掘　調　査　地　区	調査面積
昭和30年度	学術調査（第一次）	金堂跡、廻廊東半、塔跡西辺、塔南瓦溜	約 4,000㎡
31	〃　（第二次）	講堂跡、中門跡、廻廊跡西半、南大門跡、鐘楼跡 経楼跡、軒廊跡、僧坊跡の一部	
32	〃　（第三次）	僧坊跡、准胝観音堂付近遺跡、塔跡、塔廻廊跡 塔北瓦溜	
33	〃　（第四次）	塔跡、塔廻廊跡南辺、東門跡、僧坊西建物跡の一部	
34	〃　（第五次）	僧坊西建物跡、僧坊東建物跡、西境界線上の掘立 柱列跡、講堂跡根石、北門跡の推定地	
42	現状変更事前調査	東北部（外囲溝）	約　120㎡
47	環境整備（第一次）	塔院廻廊跡	150㎡
48	〃　（第二次）	塔院廻廊跡、僧坊跡、南辺築地跡	240㎡
49	〃　（第三次）	中門跡、金堂跡、廻廊跡、僧坊跡	344㎡
50	現状変更事前調査	西南部（築地・中世掘立柱建物）	1010㎡
53	〃	南東部	112㎡
54	〃	西南部、准胝観音堂付近遺跡・東北部	1180㎡
55	環境整備（第四次）	東門跡	約　400㎡

※個人住宅建築に係わる10㎡ 未満の試掘調査を除く。

Ⅳ．調　査　概　要

1．基本層序

陸奥国分寺跡の基本層序は、30～40cmの表土の下に、30～40cmの白色シルト、暗褐色土、褐色土からなる整地層がある。その下は20cm前後の遺物を含まない黒色土からなる旧表土層で、その下は20～50cmの洪積層である黄褐色ローム層がある。さらにその下は厚い砂礫層がある。

本調査区内の状況は、整地層は検出されず、また旧表土層も東門基壇や築地基底部が遺存していたトレンチ中央部分で検出されただけで、その東側と西側には検出されなかった。またローム層もトレンチ南西部には検出されず、表土下は直接砂礫層に達した。ローム層はトレンチの東に寄る程に厚く堆積している。

2．東 門 跡

東門跡は、昭和33年度に発見された礎石の根石や他の根石、礎石は検出されなかったが、虎斑状に粘土を盛った基壇を検出することが出来た。基壇は全面にわたり土壙、墓壙、溝等によ

磁北
(N)
0 20 40 60 80 100m
凡例
調査地点
僧坊西建物跡
僧坊跡
僧坊東建物跡
講堂跡
経楼跡
金堂跡
中門跡
南大門跡
築地跡
塔跡
掘立柱列

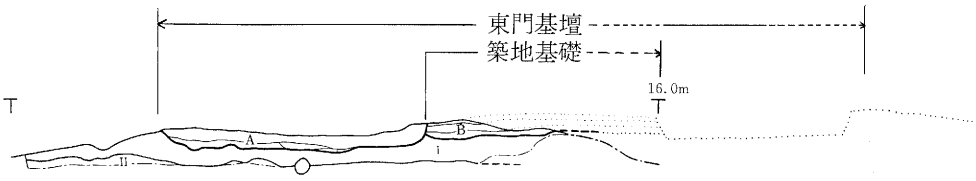
第2図　調査地点位地図

第３図　陸奥国分寺跡東門地区遺構配置図

層位	土色	土性	その他
1		山砂	表土（盛土整地層）
2	10Y R 3/3暗褐色	シルト	環境整備前表土（瓦含む）
3	10Y R 3/3暗褐色	シルト	近世瓦を含む、粘性しまりなし
4	10Y R 3/3黒褐色	シルト質粘土	旧表土
5	黄褐色	ローム	地山
A			築地崩落土
B			築地基礎
C	10Y R 3/3黒褐色	シルト	6号土壙堆積土
E		シルト質粘土	築地外縁凹地堆積層
D		シルト～シルト質粘土	8号溝堆積土
F-1	暗褐～黒褐色	シルト	7号土壙
F-2	暗褐～黒褐色	シルト	5号溝上部堆積層
F-3	暗褐色	シルト	5号溝上部堆積層
F-4	暗褐色	シルト	土壙堆積土
F-5	黒褐色	シルト～シルト質粘土	5号溝堆積土

る攪乱を受けて保存は良好と言えないものであった。南辺は削平のために完全に失なわれている。東半も殆んど削平されており、基壇の一部が帯状に残存するだけである。比較的保存が良く本来の基壇の範囲を示しているのは西辺中央部と北辺の西寄り、それに東辺の極一部分だけである。

基壇の平面規模は保存の良い所をもとにして計ると東西の幅は、9.15m であり、南北の長さは、北辺より9.35m の所まで残っている。幅は本来の基壇幅と微差しかないと考えられる。



層位	土　色	土　性	その他
A	明黄褐色～黒褐色	粘土シルト質粘土	ロームのブロック粒に、暗褐色・黒褐色土の小ブロックを混える。しまり強く堅い（東門基壇）
B	黄褐色～黒褐色	粘土質シルト・シルト	版築され堅くしまる。（築地基礎）
I	10YR ¾暗褐色	シルト	旧表土
II	10YR ⅚黄褐色	ローム	地山

第４図　東門基壇・築地基礎関係断面図

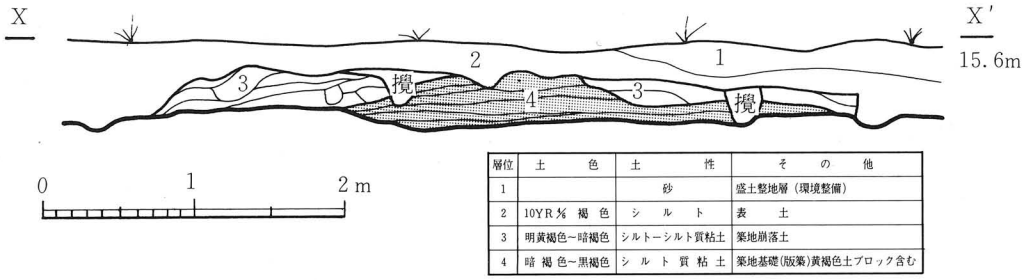
基壇は全体が一様に積まれたのではなく、第３図及び第４図に示したように、築地の基礎を版築して南北方向に通した後、さらにその両側に東門の基壇に必要な範囲だけ付け足しの積土をする方法をとっている。この積土に際しては、築地基礎と旧表土を浅く掘り込んでから積土を行なっている。第６図のピット１～５は、基壇西辺の外側に接し、90～ 120cm間隔（２と３の間にも本来はあったと考えられる）で検出されたが、これは基壇の土を積む際の土留めの板材をおさえた杭列の痕跡と考えられる。積土の幅は東西とも均等ではなく（西 3.5m 、東 2.9 m）西側の幅が広い。これは、後述するように、築地基礎と本体の中心線が一致しておらず、築地本体の中心線が西側にずれることによる。このため、築地本体の中心線からでは、東門基壇の東辺と西辺とは、それぞれ、4.59m と4.56m とほぼ等しくなる。基壇の積土は厚い所では50cm程残っている。

陸奥国分寺の東辺における東門の位置は、東門の東西中心線が不明であるため、東門基壇の北辺でみると、南辺築地の推定中心線より約 116m （約 353尺）である。南辺築地の中心線が南辺東端で大きく南にずれていないかぎり、東門の東西中心線は、方 800尺の寺域を考えた場合は、その中心である 400尺よりもいくらか南側に寄っていたと考えられる。

３．築　地

築地は、本体についてはすでに削平されていたが、東門基壇の北側に基礎部分が遺存してい

た。基礎の東西両側には1m余りに渡って築地崩落土が堆積していた。先述したように築地の基礎は、東門基壇部で跡切れることなく南北に通っている。保存の良い所では、幅 324cm、版築土層は厚い所では36cmを計る。積方は、旧表土を浅い舟底状に20cm前後掘り込んでから黄褐色と黒褐色の薄層をもって版築している。東門基壇の大まかな積土とは対照的である。



層位	土色	土性	その他
1		砂	盛土整地層（環境整備）
2	10YR⅔ 褐色	シルト	表土
3	明黄褐色～暗褐色	シルト～シルト質粘土	築地崩落土
4	暗褐色～黒褐色	シルト質粘土	築地基礎(版築)黄褐色土ブロック含む

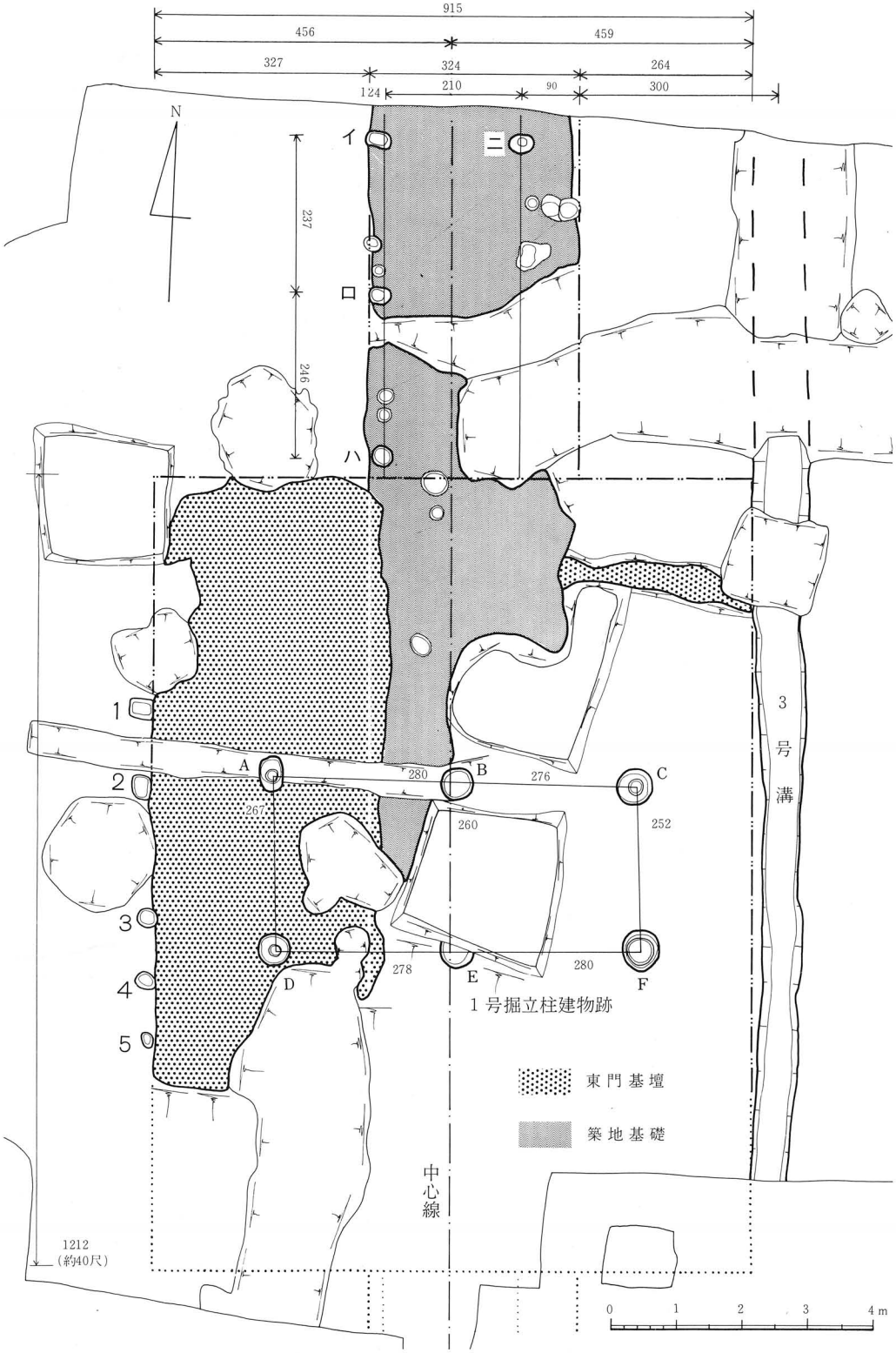
第5図　築地基礎断面図

築地基礎上面からは、数個のピットが検出されたが、このなかで、イ～ニは、築地本体の寄柱と考えられる。寄柱の間隔はイ～ロ、ロ～ハではそれぞれ 237cm（約8尺）、246cm（約8尺）あり、また築地幅を示すイ～ニは 210cm（約7尺）ある。築地本体東辺に当るピットニつから築地基礎の東辺までは90cmあり、この間が「犬走り」となる。築地本体の外側に犬走りを設けたため、築地の基礎と本体の中心線は一致せず、築地本体の中心線は西に寄る。そしてこの築地本体の中心線は、南大門、金堂、講堂の中心を通る伽藍中軸線から 121m（約 400尺）のところにあたる。（第6図参照）

4. 外　囲　溝

3号溝は、東門基壇東側の直下を通り、東門基壇および築地の南北中心線と平行する溝で、上幅が60～90cm、底面幅30～50 cm、深さ50 cm前後の断面逆台形の溝である。北部は8号溝に切られている。築地基礎の東辺から溝の中心までは 300 cm 、築地本体中心から溝の西辺までは 459cmを計る。堆積土は大部分が暗褐色土と黒褐色土からなるが、上面に築地または基壇の崩落土と考えられる黄褐色粘土の層が観察される。

この溝は「西境界線上の掘立柱列跡」の外側約3mで掘立柱列と平行して発見された溝（註1）と対応関係にあると考えられる。また東北部の発掘調査（註2）の際に発見された溝に連結すると考えられる。ただし、東北部で検出した溝が伽藍中軸線から 424尺離れていたのに対し、本調査の溝は 415尺しか離れていないので両溝は、トレンチの北側で「┌┘」形になって連結することが考えられる。溝の性格は、陸奥国分寺の外囲溝、すなわち「伽藍地とその外側を



第6図　東門・築地実測図・復元図

区劃する溝」（註３）と考えられる。

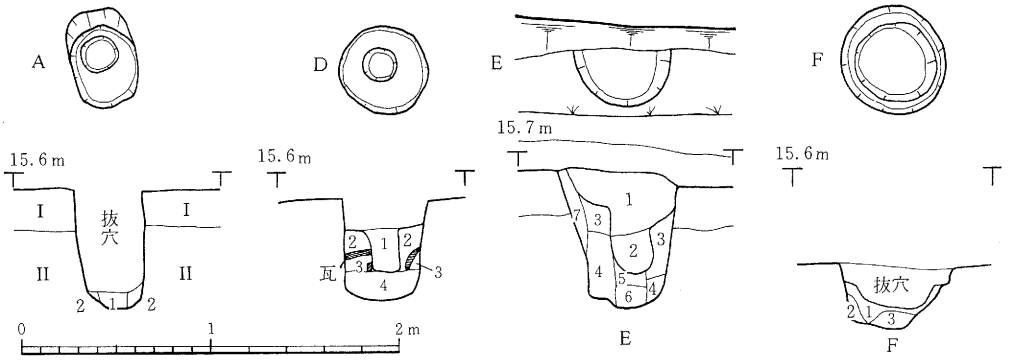
註１　伊東信雄、志間泰治　「陸奥国分寺跡」陸奥国分寺跡発掘調査委員会編、昭和36年による。

註２　工藤雅樹「埋蔵文化財緊急発掘調査報告書―陸奥国分寺跡東北部発掘調査報告―」宮城県文化財調査報告書第14集、宮城県教育委員会（昭和42年）

註３　註２の報告書文中にて工藤雅樹氏が指摘。

５．掘立柱建物跡

１号掘立柱建物跡は、東門基壇を切る。梁行２間、桁行１間の東西棟である。梁行の柱間寸法は南側では 287～ 280cm、総長 558m である。北側は 280～ 276cm、総長 556cmである。桁行の柱間寸法は西側で 267cm、東側は 252cmを計る。柱穴掘り方は直径50cm前後の円形で、深さは40～70cmある。柱穴には抜き取り穴が検出されたが、底面に残っている柱痕跡の直径は15cm程である。抜き取り穴からは瓦、ロクロ調整痕のある土師器が出土していることから、平安時代の建物跡と考えられる。



No.	層位	土色	土性	その他
A	I	10YR 6／6明黄褐色	粘土	黒褐色粘土を約30％含む。東門基壇
	II	10YR 2／3黒褐色	シルト質粘土	旧表土層
	1	10YR 3／3暗褐色	シルト質粘土	黄褐色粘土粒を含む
	2	10YR 2／3黒褐色	シルト質粘土	黄褐色粘土粒を含む
D	1	10YR 3／3暗褐色	粘土質シルト	
	2	10YR 4／4褐色	粘土	明黄褐色土粒を多量に含む
	3	10YR 4／4褐色	シルト質粘土	2より明るい。炭化物粒を含む
	4	10YR 4／4褐色	シルト質粘土	しまり強く堅い。上面に酸化鉄のリング有り
E	1	10YR 3／3暗褐色	シルト	しまりやや強く。瓦を少数含む。
	2	10YR 2／3黒褐色	粘土質シルト	瓦を含む。やや軟質である。
	3	10YR3／4暗褐色	粘土質シルト	黄褐色土･黒褐色土のブロックを少量含む
	4	10YR 2／3黒褐色	粘土質シルト	黄褐色土をブロック状に含む、軟質
	5	10YR 4／4褐色	シルト質粘土	炭化物粒を含む、粘性強い。
	6	10YR 3／4暗褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土をブロック状に少量含む。
	7	10YR 2／2黒褐色	粘土質シルト	黄褐色粘土粒をわずかに含む
	I		山砂	整地用盛土
	II	10YR 3／4暗褐色	シルト	瓦片、炭化物を含む。
	III	10YR 2／2黒褐色	粘土質シルト	旧表土層
F	1	10YR 4／6褐色	シルト質粘土	しまり粘性なし
	2	10YR 3／3暗褐色	シルト	褐色土のブロックを含む
	3	10YR 4／4褐色	シルト質粘土	

第７図　１号掘立柱建物跡柱穴実測図

この建物の東辺および西辺は、東門基壇の東西両辺よりほぼ同等に 170～ 180cm（約6尺）内側に位置し、南北中央列は築地の中心線とほぼ一致する。建物の西辺以外は、東門基壇の各辺の方向と若干のずれがあるが、全体的な方向性にかなり類似性が感じられる。

この建物の性格については、小規模過ぎるために居住または倉庫に関係するとは考えられず、また東門基壇をかなり意識してその中央付近に構築していることから、基壇上に礎石を用いて建てられた八脚門が廃された後、それに代り簡略化して建てられた四脚門と考えることもできる。しかし、桁行が 267～ 252cmと狭く、また逆に桁行に比して梁行が 276～ 280cmと広いことから、四脚門跡と断定するには十分なデータと言えない。

6．土　　壙

土壙も多数検出されたが、このうち古いものは1～8号土壙である。1号土壙と2号土壙からは多量の古瓦が出土したので、小規模な瓦溜めと考えられる。

7．溝

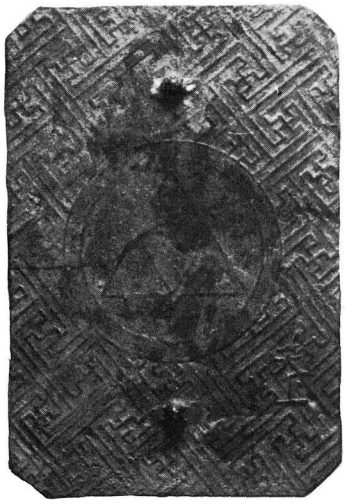
溝跡は1～10号まで検出された。3号溝以外で古い溝と考えられるものは、5、6、7、8 10号溝である。5号溝からは陸奥国分寺の創建期の瓦である重弁蓮華文軒丸瓦と偏行唐草文軒平瓦、重弧文軒平瓦が数個体分出土した。また7号溝からは、宝相華文軒丸瓦と連珠文軒平瓦が出土している。

1．2．4号溝は近世、9号は近代の溝と考えられる。

8．近世墓壙

調査区は、公有化以前には墓地となっており、学頭の墓等があったので、今回の調査でも、17基の墓壙が発見された。多くは1～ 1.5m方形の平面形で、2号は 180cm掘っても底面に至らなかった。以後明らかに墓とわかるものについては上面を一部下げただけであるが、不整形で浅い5～9号については完掘した。

墓壙のうち8号墓壙は、長辺 1.2m、短辺1.0mの長方形の平面形を呈し、深さは55cmを計る。埋土最下層中より、坏6点、寛永通宝6点、和鋏1点、キセル2点、石硯1点、「天下一」銘のある長方形の鏡1点が歯の残片とともに出土した。（第13－14図）また6号墓壙からも寛永通宝6点が出土している。



8号墓壙出土近世鏡

1号土壙

層位	土　　色	土土性	そ　の　他
1	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト	粘性なし、瓦・土師器片、炭化物含む
2	10YR 3/3暗 褐 色	シルト	粘性なし、しまりなし、炭化物含む
3	10YR 4/4褐　色	シルト	1.2層より粘性しまりあり、瓦を多く含む
4	10YR 3/2黒 褐 色	シルト	粘性しまりなし、瓦を含む

2号土壙

層位	土　　色	土　性	そ　の　他
1	10YR 4/4褐　色	シルト	多量の瓦を含む

3号土壙

層位	土　　色	土　性	そ　の　他
1	10YR 4/6褐　色	粘土質シルト	瓦片及び少量の炭化物を含む、軟質
2	10YR 3/3暗褐色	シ　ル　ト	黄褐色土粒を少量含む、しまり強く堅い

4号墓壙

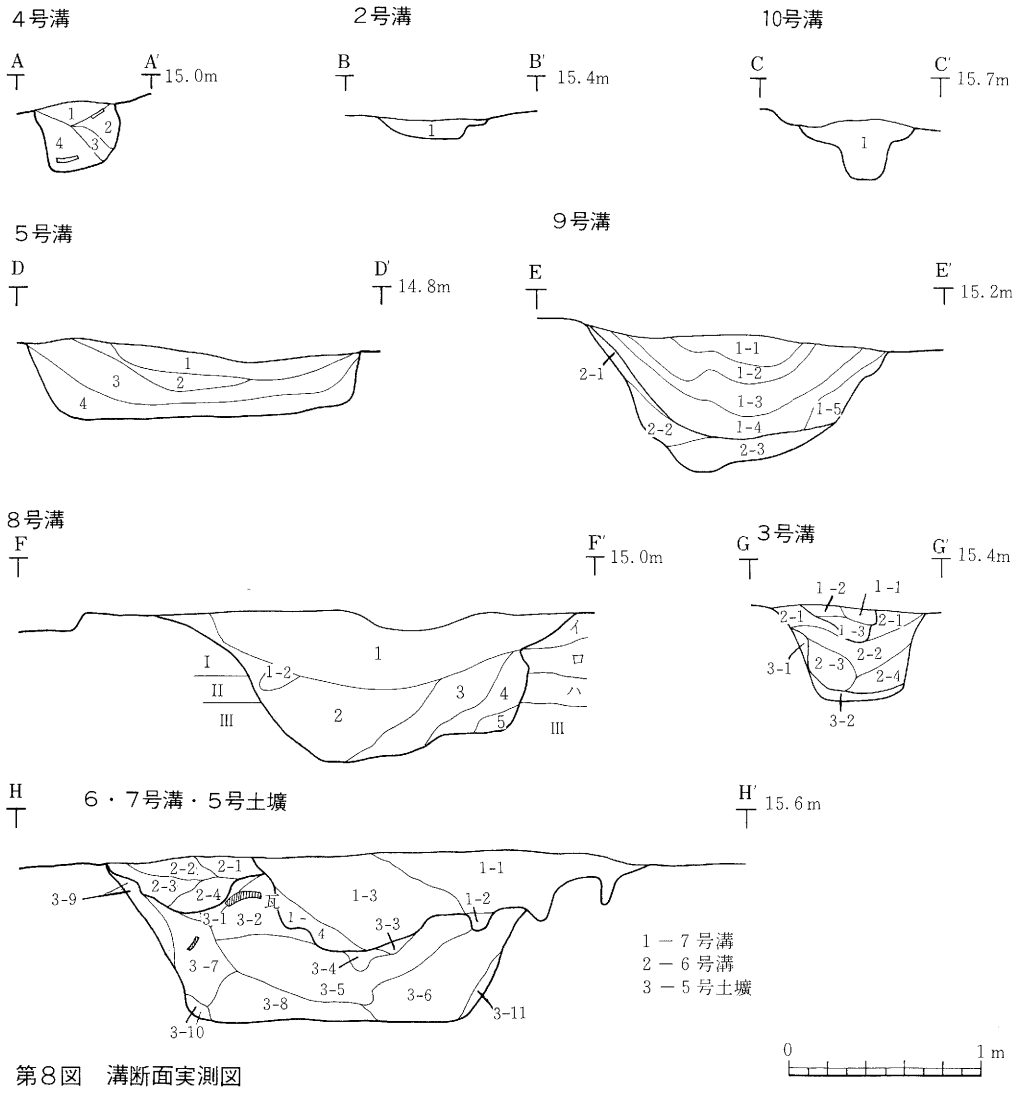
層位	土　　色	土　性	そ　の　他
1	7.5YR 3/3暗褐色	シルト	石、瓦を多量に混入、粘性しまりなし

8号墓壙

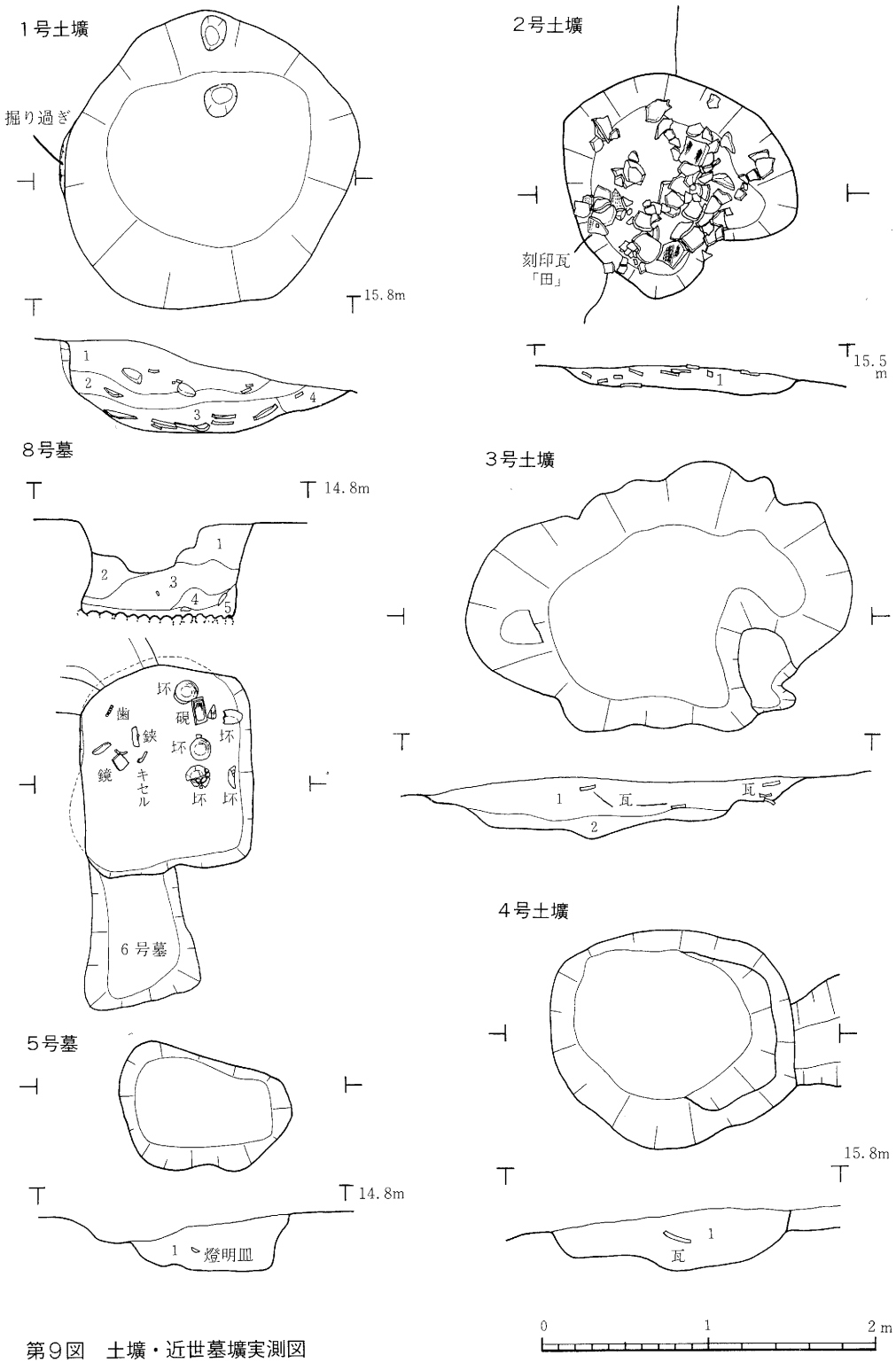
層位	土　　色	土　性	そ　の　他
1	10YR 3/2黒 褐 色	シ　ル　ト	黄褐色土をブロック状に含む、軟質
2	10YR 5/4にぶい黄褐色	粘土質シルト	ブロック土の堆積　　軟質
3	10YR 3/3暗 褐 色	シ　ル　ト	黄褐色土粒を含む、骨片を含む、軟質
4	10YR 4/4褐　色	シ　ル　ト	黄褐色土をブロック状に含む、軟質
5	10YR 4/6褐　色	シ　ル　ト	軟　質

5号墓壙

層位	土　　色	土　性	そ　の　他
1	10YR 3/4暗褐色	粘土質シルト	黄褐色ロームをブロック状に含む



第8図　溝断面実測図



第９図　土壙・近世墓壙実測図

4号溝

層位	土　　色	土　性	そ　の　他
1	10YR 3/3暗 褐 色	粘土質シルト	粘性しまりなし
2	10YR 5/4褐　色	粘土質シルト	粘性しまりなし
3	10YR 5/6明黄褐色	粘土質シルト	粘性しまりなし
4	10YR 3/4暗 褐 色	シ　ル　ト	明黄褐色土を斑状に含むしまりなし

2号溝

層位	土　　色	土　性	そ　の　他
1	10YR 3/3暗褐色	粘土質シルト	瓦片を含む、しまりなく軟質

10号溝

層位	土　　色	土　性	そ　の　他
1	10YR 5/4褐　色	シルト質粘土	明黄褐色土をブロック状に含む、しまり強い

5号溝

層位	土　　色	土　性	そ　の　他
1	10YR 3/2黒褐色	シ　ル　ト	粘性あり、しまりやや強い
2 1	10YR 3/3黒褐色	シ　ル　ト	粘性あり、しまりやや強い
3	10YR 3/2黒褐色	粘土質シルト	明黄褐色土粒をわずかに含む
4	10YR 3/2黒褐色	シルト質粘土	明黄褐色土のブロックを多量に含む

9号溝

層位	土　　色	土　性	そ　の　他
1-1	10YR 3/3黒褐色	粘土質シルト	褐色シルトを粒状に含む
1-2	10YR 3/3暗褐色	シ　ル　ト	褐色シルトをブロック状に含む,パサつく
1-3	10YR 3/4暗褐色	シ　ル　ト	褐色シルト粒を多く含む
1-4	10YR 3/3黒褐色	粘土質シルト	褐色シルト細粒を含む
1-5	10YR 3/2黒褐色	シ　ル　ト	褐色シルトを多く含む
2-1	10YR 5/6褐　色	シ　ル　ト	暗褐色シルトのブロックを含む。パサつく
2-2	10YR 3/4暗褐色	シ　ル　ト	
2-3	10YR 5/6黄褐色	シ　ル　ト	暗褐色シルトを粒状に含む

3号溝

層位	土　　色	土　性	そ　の　他
1-1	10YR 5/6黄褐色粘土	粘　土	東門基壇または築地よりの流れ込みか
1-2	10YR 3/3黒　褐　色	シ　ル　ト	黄褐色粘土を斑状に含む
1-3	10YR 3/3黒　褐　色	シ　ル　ト	黄褐色粘土を少量含む
2-1	10YR 3/3黒　褐　色	シ　ル　ト	しまり強い
2-2	10YR 3/3黒　褐　色	シ　ル　ト	粘性強い、褐色土を粒状に含む
2-3	10YR 3/3黒　褐　色	シ　ル　ト	やや粘性あり
2-4	10YR 3/3暗　褐　色	シ　ル　ト	褐色シルトと瓦層となる
3-1	10YR 5/4褐　　色	シ　ル　ト	黄褐色シルトをブロック状に含む
3-2	10YR 5/6褐　　色	粘　土	しまり強く、粘性あり

8号溝

層位	土　　色	土　性	そ　の　他	
1	10YR 5/4褐　色	シ　ル　ト	瓦・炭化物を少量含む、しまりあり、	
1-2			1層に類似、黄褐色土粒を含む、	
2	10YR 3/3黒 褐 色	粘土質シルト	瓦・小礫・炭化物黄褐色土粒を少量含む、	
3	10YR 5/4褐　色	粘土質シルト	黄褐色土粒を多量に含む、しまり強い。	
4	10YR 3/3黒 褐 色	シ　ル　ト	粘性強く軟質	
5	10YR 5/6褐　色	シ　ル　ト	黄褐色土(地山)を粒状に多量に含む	
イ	10YR 3/4暗 褐 色	シ　ル　ト	黄褐色土を粒状に含む、しまりあり	Pit
ロ	10YR 3/3黒 褐 色	シ　ル　ト	炭化物を含む、しまり強い	
ハ	10YR 3/3黒 褐 色	シ　ル　ト	炭化物を含む、黄褐色土を含む	
Ⅰ	10YR 3/3黒 褐 色	シ　ル　ト	旧 表 土	
Ⅱ	10YR 5/4褐　色	ロ　ー　ム	地　　山	
Ⅲ	10YR 5/4にぶい黄褐色	ロ　ー　ム	地　　山	

6・7号溝・5号土壙

層位	土　　色	土　性	そ　の　他	
1-1	10YR 3/3暗 褐 色	シ　ル　ト	にぶい黄橙色土・小石を含む。	7号溝
1-2	10YR 3/3黒 褐 色	粒土質シルト	しまり強く堅い。	
1-3	10YR 3/3黒 褐 色	シ　ル　ト	多量の瓦を含む。	
1-4	10YR 3/3暗 褐 色	粘土質シルト	にぶい黄橙色土粒を含む、軟質。	
2-1	10YR 3/4暗 褐 色	シ　ル　ト	瓦片含む、やや粘性がある。	6号溝
2-2	10YR 3/3黒 褐 色	粘土質シルト	瓦片含む、炭化物含む。	
2-3	10YR 5/4褐　色	粘土質シルト	明黄褐色土ブロックを含む。	
2-4	10YR 3/3暗 褐 色	粘土質シルト	炭化物、瓦を含み、しまり強く堅い。	
3-1	10YR 3/4暗 褐 色	シ　ル　ト	少量の炭化物粒、黄褐色土粒を含む。	5号土壙
3-2	10YR 3/3暗 褐 色	シ　ル　ト	瓦を含む、やや軟質。	
3-3	10YR 3/3黒 褐 色	シ　ル　ト	瓦を含む、軟質	
3-4	10YR 3/3黒 褐 色	シ　ル　ト	軟　質	
3-5	10YR 5/4褐　色	粘土質シルト	黄褐色土をブロック状に含む。	
3-6	10YR 3/4暗 褐 色	粘土質シルト	古瓦、炭化物粒を含む、しまり強い。	
3-7	10YR 3/3黒 褐 色	シ　ル　ト	粘性を帯びる。	
3-8	10YR 3/3暗 褐 色	粘土質シルト	炭化物黄褐色土を粒状に含む。	
3-9	10YR 3/3黒 褐 色	粘土質シルト	明黄褐色土を斑状に含む。	
3-10	10YR 5/4にぶい黄褐色	粘土質シルト	酸化鉄を含む、しまり強く堅い。	
3-11	10YR 5/6黄 褐 色	粘土質シルト	軟　質	

Ⅳ. 出土遺物

出土遺物は瓦類が最も多く、遺物収納用コンテナ約50箱分の全出土遺物の90％以上を占める。次に土器類は土師器と土師質の土器、近世の素焼きの坏と燈明皿が数個体分出土した。須恵器は小片が数点出土しているに過ぎない。その他には近世墓の副葬品や、築地崩落土から出土した石鏃がある。

1　瓦

本調査において出土した瓦のうち、文様瓦は軒丸瓦（鐙瓦）29点、軒平瓦（宇瓦）25点、計

54点である。その分類と各個体数は表２の通りである。なお、分類の基準は「陸奥国分寺跡」（陸奥国分寺跡発掘調査委員会編、昭和36年）における伊東信雄氏の分類基準に準じている。

表－２　出土文様瓦分類表

鐙瓦			計	宇瓦			計
重弁蓮華文鐙瓦	第１類	7	15	重弧文宇瓦	第１類	4（第11図７）	4
	第２類	3（第11図１・２）			第２類	0	
	第３類	1			第３類	0	
	第４類	2			不　明	0	
	第５類	1		偏行唐草文宇瓦	第１類	4（第11図８）	5
	第６類	1			第２類	0	
	その他	3			第３類	0	
	不　明	2			第４類	1	
宝相華文鐙瓦	第１類	0	10		第５類	0	
	第２類	5（第11図４）		均整唐草文宇瓦	第１類	1（第12図３）	3
	第３類	0			第２類	0	
	第４類	2（第11図５）			第３類	1（第12図２）	
	第５類	0			第４類	1	
	その他	1		連珠文宇瓦	第１類	4	10
	不　明	2			第２類	4（第12図４）	
細弁蓮華文鐙瓦	第１類	0（第11図６）	1		その他	1	
	第２類	1			不　明	1	
変形蓮華文鐙瓦		1（第11図３）	1	山形文宇瓦		1（第12図１）	1
不　明		2	2	不　明		1	1
総計			29	総計			25

第11図１．２．８に図示した瓦が、陸奥国分寺の創建時の組み合わせであり、第11図４．５６．第12図２．３．４は平安期のものである。第11図３の変形蓮華文軒丸瓦は塔と塔廻廊以外からの出土はこれが初めてである。

刻印瓦は、２号土壙出土の凸面陽刻の「田」と、７号溝出土の凹面陰刻の「真」の２点がある。またヘラ書き瓦も表土中より２点出土した。判読できないが「大」？と「十」？であろうか。

２．土　　器

〈**土師器**〉　土師器は出土数が少なく図化できたのは２点だけである。第13図１はロクロを用いず、丸底の底部と体部との間に沈線が巡り、ヘラミガキされた内面には黒色処理してある。小破片で１号土壙より出土した。２は底部に回転糸切り痕を有し体部下端はヘラケズリされる。ヘラミガキされた内面に黒色処理してある。７号溝より出土した。

〈**土師質の土器**〉　第13図３～８は８号土壙より一括出土した坏類である。３～５の底部には

回転糸切り痕を有す。体部はいずれも内外面ともロクロ調整される。色調は黄橙色から黒褐色で均一ではない。内黒処理をした痕跡はないが、焼成の状態は土師器と類似する。ロクロ土師器の一般的属性である内面黒色処理と、内面のヘラミガキ調整とを具備していない点で土師器とは区別される土器である。

〈素焼き土器〉　素焼き土器には坏と燈明皿があり、全て近世の墓壙と溝から出土したものである。坏は口径11cm以下のもの2点と11cm以上の4点の二種があるが、器高は 2.6～ 2.7cmで全て左回転の糸切痕を有し、体部の内外面はロクロ調整される。底径に比して器高は低く、口径が小さい。第13図9～14。

燈明皿は坏を小形したような器形で、燈芯が置かれた部分に黒斑が認められる。底部は全て右回転の糸切痕を有す。第13図15～18。

3．その他の出土遺物

その他の出土遺物としては、8号墓からの出土品の、和鋏、粘板岩製硯、キセル2点、鏡1点、寛永通宝3点を図示した。第13図21のキセルの羅宇は鉄に漆を塗布したもので、22の羅宇は竹製である。火皿、雁首、吸口はいずれも青銅である。鏡は縦8.5cm、横6cmの長方形で角が落されている。背面は中央に幅の広い微隆帯で区画し、その中に三鱗の家紋を置き、区画外は卍と斜めの直線を組み合わせて文様を構成している。鈕は上と下にあり、長辺に直交して孔があけられている。右下には「天下一」の銘がある。寛永通宝には、背面が無文で大型（3）と小型（4）のものと、背面に「文」字が鋳出されている（2）ものとの三種がある。

Ⅳ．まとめと考察

1．調査成果のまとめと考察

① 東門跡には、礎石や根石は遺存せず、基壇自体もかなり削平を受けているが、基壇北東角から中央部にかけては比較的良く保存されている。保存部分から、東・西・北の3辺が明らかとなったが、南辺の位置は不明であった。また東門に続く施設は築地であった。

② 保存されている部分で計測すると基壇幅は9.15m（約30尺）あり、長さは北辺より9.35mまで残存している。

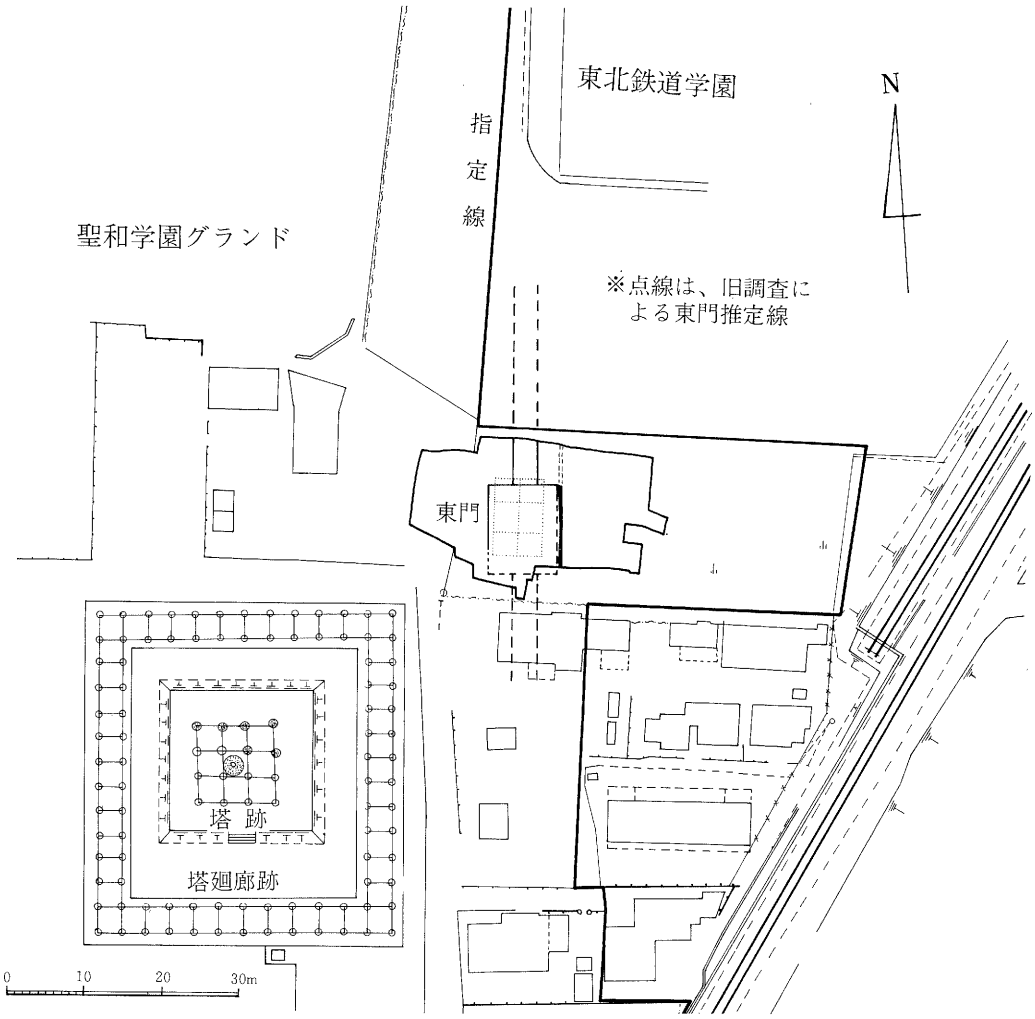
③ 東門の基壇は、東辺の築地基礎を利用して基壇中央部とし、その両側にさらに掘り込み地業を行なって粘土を積み上げて張り出させて基壇を築く工法をとっている。

④ 東門の北側には幅3mで築地の基礎地業が残り、この上に基底幅 2.1m、寄柱間隔約2.4mの築地があったことが明らかとなった。

⑤ 東門及び調査部分の築地の中心線は伽藍中心線より 121m（約 400尺）の位置に当り、方

向は磁北から計測するN－3°15′－Eで、伽藍中心線の方向より１度程東に偏している。東門は、推定されている陸奥国分寺南東角より400尺の地点より若干南寄りに位置する。

⑥　東門の外側にも、陸奥国分寺の伽藍地を区画する溝が発見された。溝の堆積土上面には断面半円形の築地の崩落土と観られる粘土層が帯状に検出されたが、この層は西辺の外囲溝上面でも検出されているので（註１）西辺の掘立柱列も築地に関係すると考えられる。とすれば、陸奥国分寺の東辺、南辺、西辺は、築地とその外側の溝により区画されていたことになる。



第10図　昭和33年・55年両調査複合図

⑦　昭和33年度の調査と本調査の成果を対比すると、前者は東門基壇について「積土層は南北約65尺、東西30尺の広範囲に亘ってみられる。」と報告している。（註２）東西30尺という数値は本調査成果の倍以上である。これは前調査が時間的に制約された短期調査であったた

め、東門と築地、築地とその崩落土を区別する前に調査を終え、東門と築地の残存部を合せて計測したことによるものであろう。

また三ケ所で発見された礫群を根石と考えることによって復元した八脚門も、第10図に示すように、実際の東門基壇より全体として北方向と西方向にずれている。このことから根石と考えた礫群は東門とは関係ないものであったと考えられる。

2．環境整備のための東門跡の復元について

東門地区の環境整備の実施にあたり、東門に接続する築地については必要に足る資料を得たが、東門については、基壇の長さ、門の大きさ、礎石の位置等不明確であった。そこで東門の環境整備に当っては次案による推定復元をする考えである。

① 1号掘立柱建物の東辺と西辺は、それ以前にあった八脚門と何らかの関連性があり、その柱列を反映すると考えると、両辺から東門基壇の各辺までの距離は 180cm（約6尺)である。したがって東門の梁行は、9.15m－(1.8m × 2)=5.55m で、間尺は5.55m ÷ 2 =27.7m ≒ 9尺となる。

② 八脚間の東西の各柱列からの基壇の東西各柱列までの距離と、基壇の南北各辺から門の各柱列までの距離は等しく、180cmであったと考える。

③ 東門はその梁行からみて南大門より一周り小さい規模が考えられる。その場合、東門の梁行が9尺等間であるのに対し、南大門の梁行が12尺等間であるから、東門と南大門は9：12＝3：4の関係が考えられる。とすれば、桁行の総長は、南大門の34尺に対し、東門は（34尺×¾＝25.5≒）26尺となる。その内訳は比率からいって、6.95尺－12尺－6.95尺≒7－12－7(尺)である。しかし、7尺という間尺は他に比して短か過ぎるようなので、8－12－8（尺）計28尺の桁行が想定される。

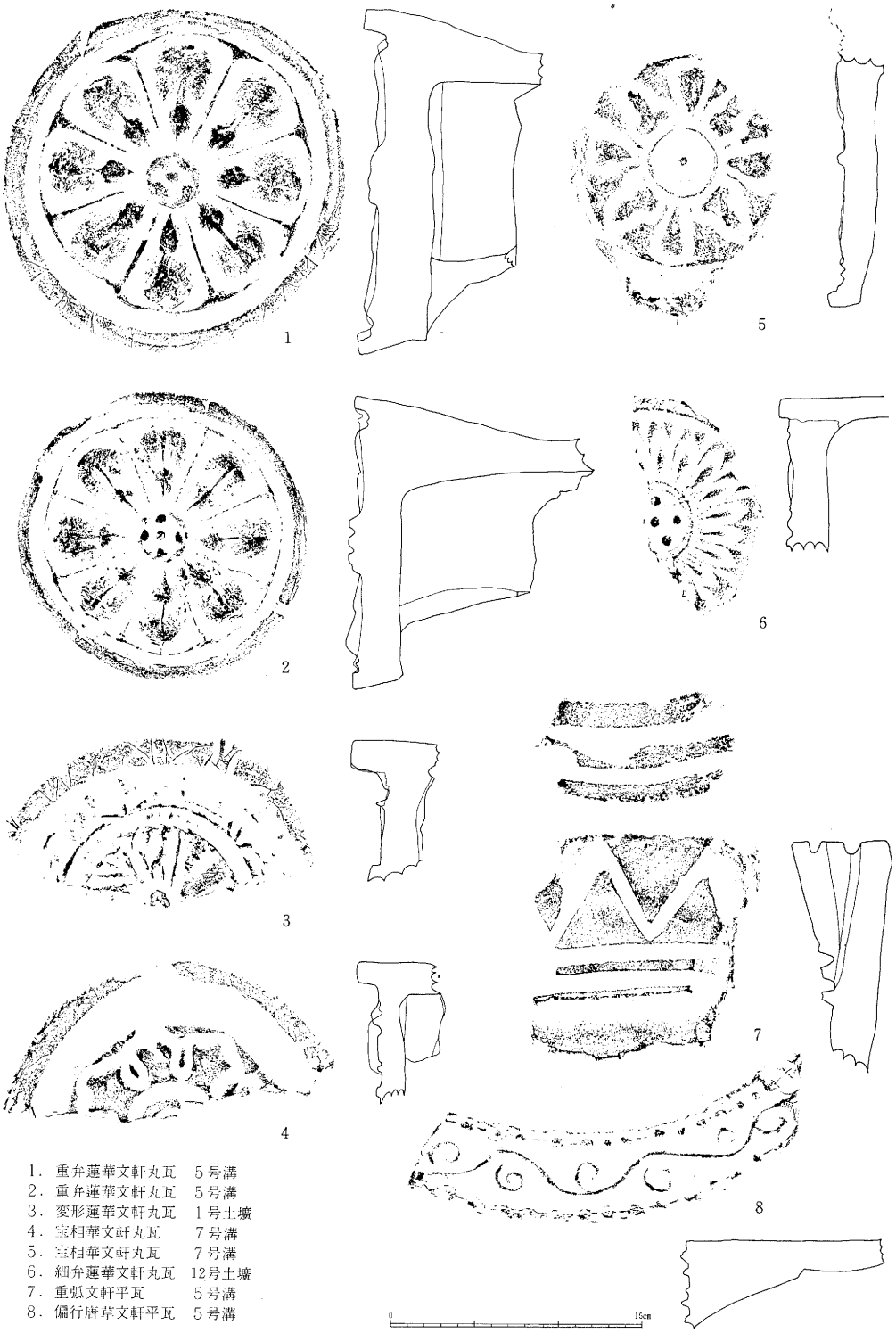
④ 以上のことから東門は、桁行8－12－8（尺）、総長28尺、梁行9－9（尺）、総長18尺の八脚門で、その基壇は幅が東西で、18尺＋(6尺×2)=30尺＝9.09m（≒9.15m）、長さが南北で、28尺＋(6尺×2)=40尺≒12.12m であったと推定し復元することが適当と考えられる。基壇の長さの12.12m は基壇北辺から1号掘立柱建物の東西の中心線までの距離の2倍（約11.80m）に近い。

この門に比較的類似する門としては、多賀城廃寺中門があり、その規模は、桁行9－12－9（尺）　梁行9－9（尺）、基壇は南北30尺、東西38尺となっている。（註3）

註1　伊藤信雄、志間泰治「陸奥国分寺跡」陸奥国分寺跡発掘調査委員会編、昭和36年、64頁

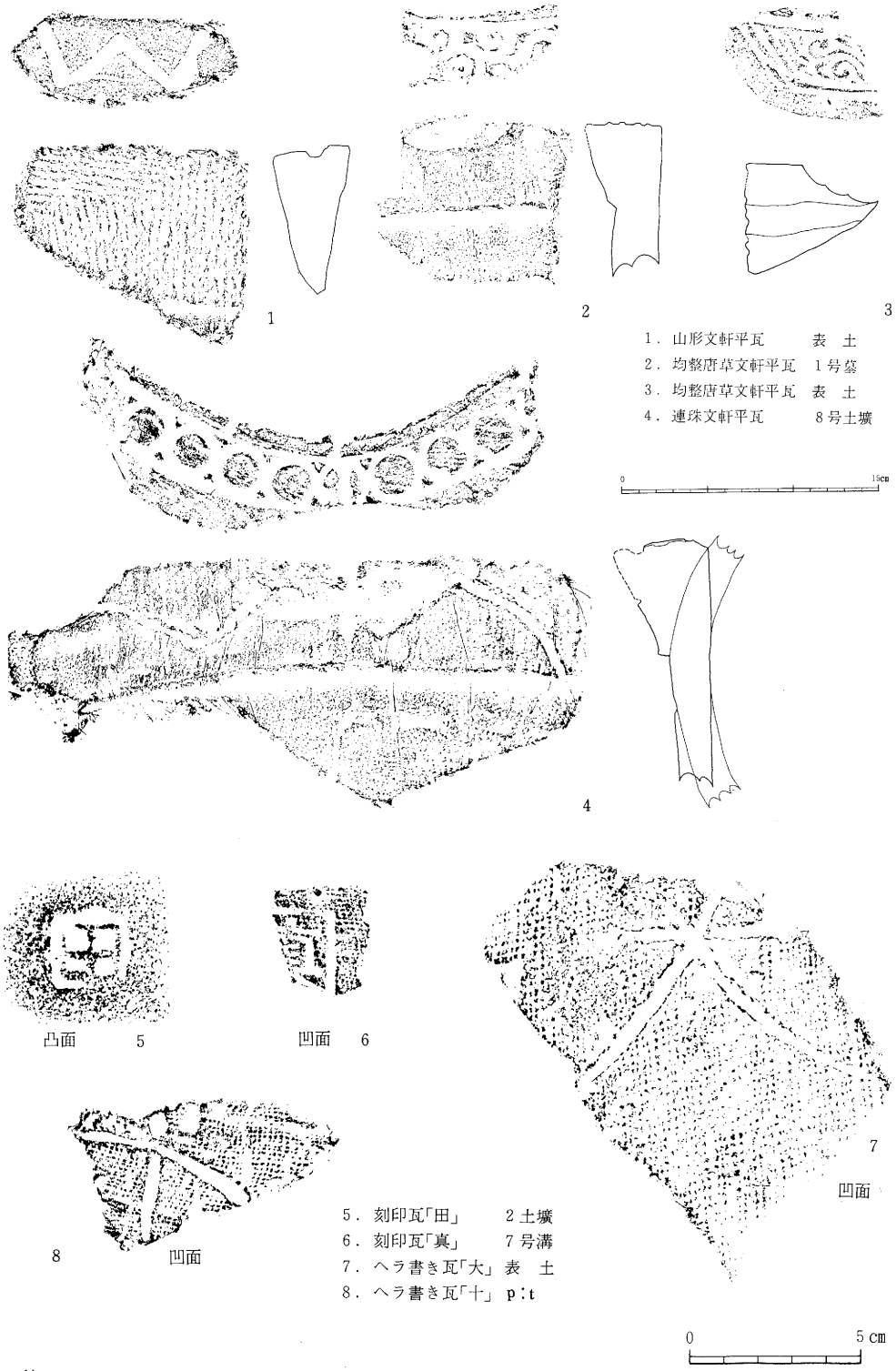
註2　註1に同じ、59頁

註3　宮城県教育委員会・多賀城町　多賀城跡調査報告Ⅰ多賀城廃寺跡　昭和45年

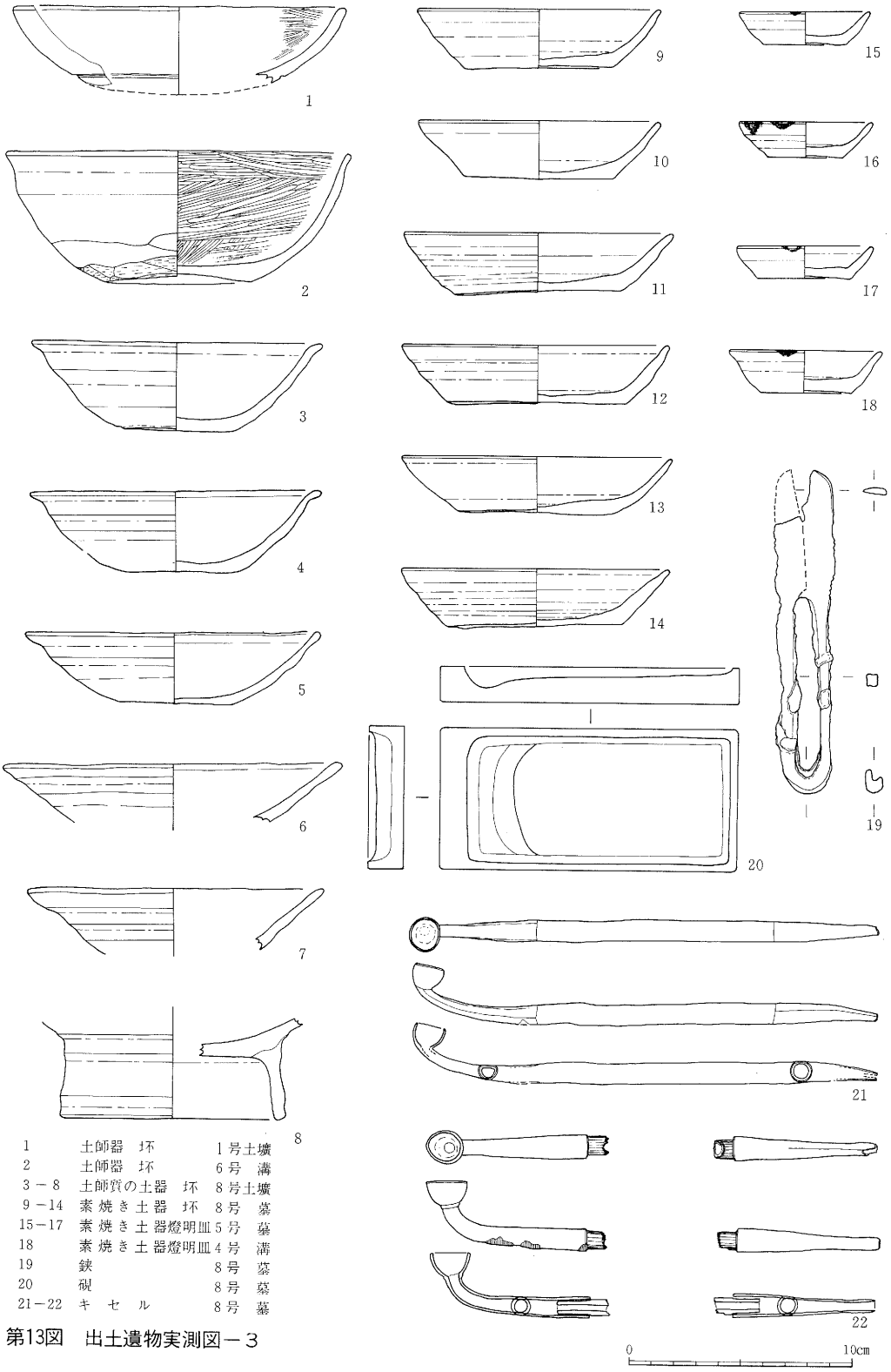


1．重弁蓮華文軒丸瓦　5号溝
2．重弁蓮華文軒丸瓦　5号溝
3．変形蓮華文軒丸瓦　1号土壙
4．宝相華文軒丸瓦　7号溝
5．宝相華文軒丸瓦　7号溝
6．細弁蓮華文軒丸瓦　12号土壙
7．重弧文軒平瓦　5号溝
8．偏行唐草文軒平瓦　5号溝

第11図　出土遺物実測・拓影－1

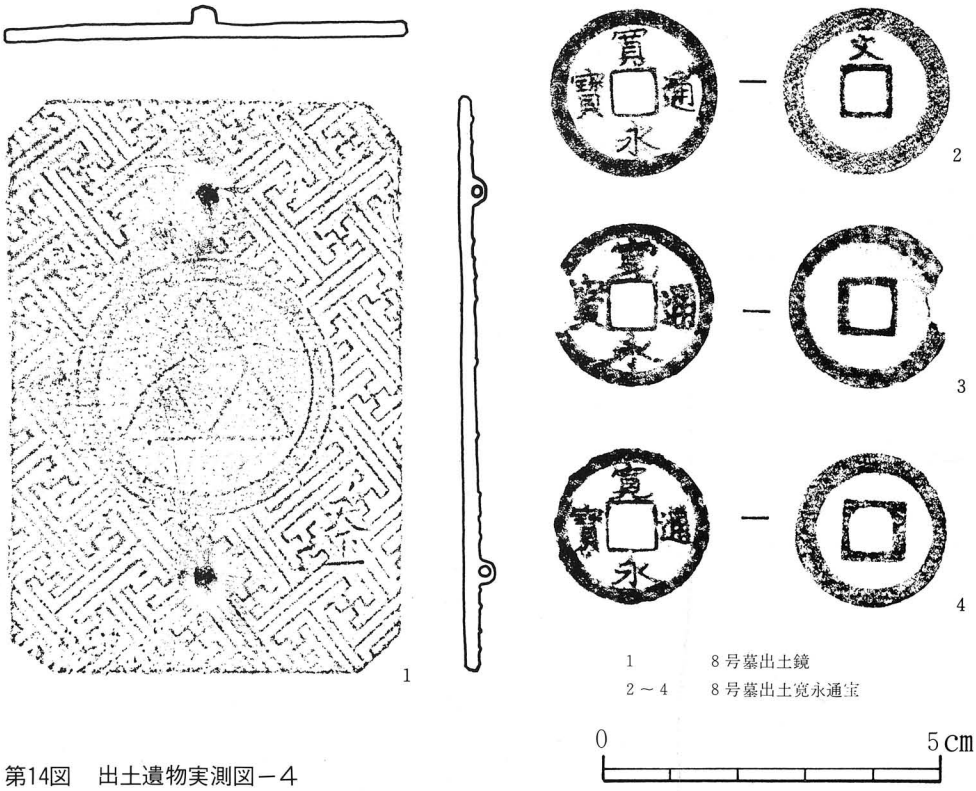


第12図　出土遺物実測図・拓影－2



1	土師器　坏	1号土壙
2	土師器　坏	6号　溝
3－8	土師質の土器　坏	8号土壙
9－14	素焼き土器　坏	8号　墓
15－17	素焼き土器燈明皿	5号　墓
18	素焼き土器燈明皿	4号　溝
19	鋏	8号　墓
20	硯	8号　墓
21－22	キ　セ　ル	8号　墓

第13図　出土遺物実測図－3



第14図　出土遺物実測図－4

史跡陸奥国分寺跡全景

調査区全景ー西側
（北より）

調査区全景ー東側
（北より）

東門基壇ー西部
（南より）

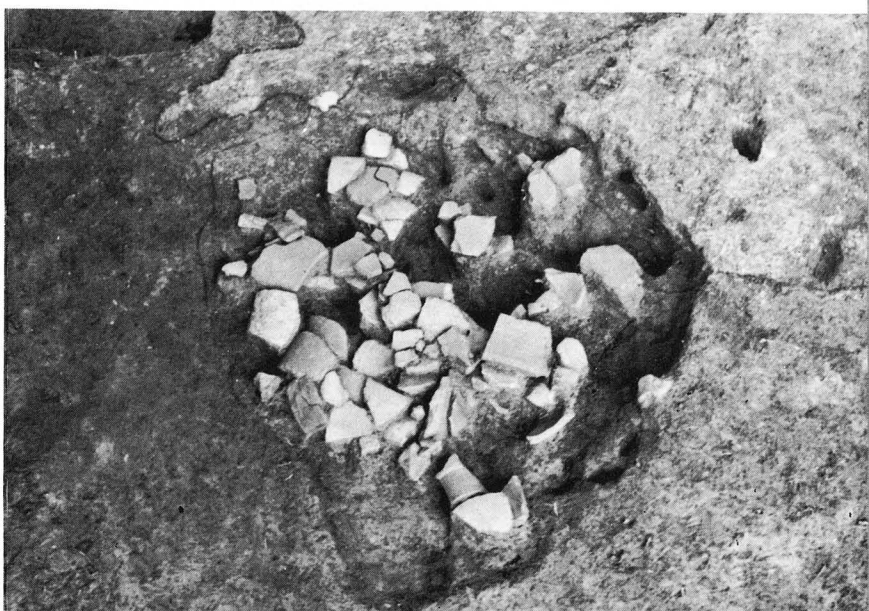
東門基壇積土状況
旧トレンチによる断面
（西南より）

東門基壇東側残存部
（南より）

東門基壇と築地基礎断面
（南より）

築地基礎残存部
（北より）

５号溝出土重弁蓮華文
軒丸瓦（南より）
第11図１.２



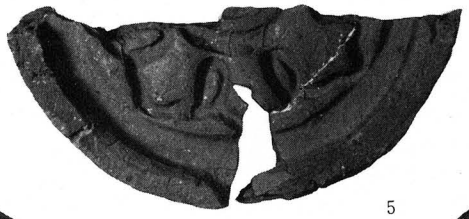
２号土壙遺物出土状況
（西より）

1

2

3

4



5

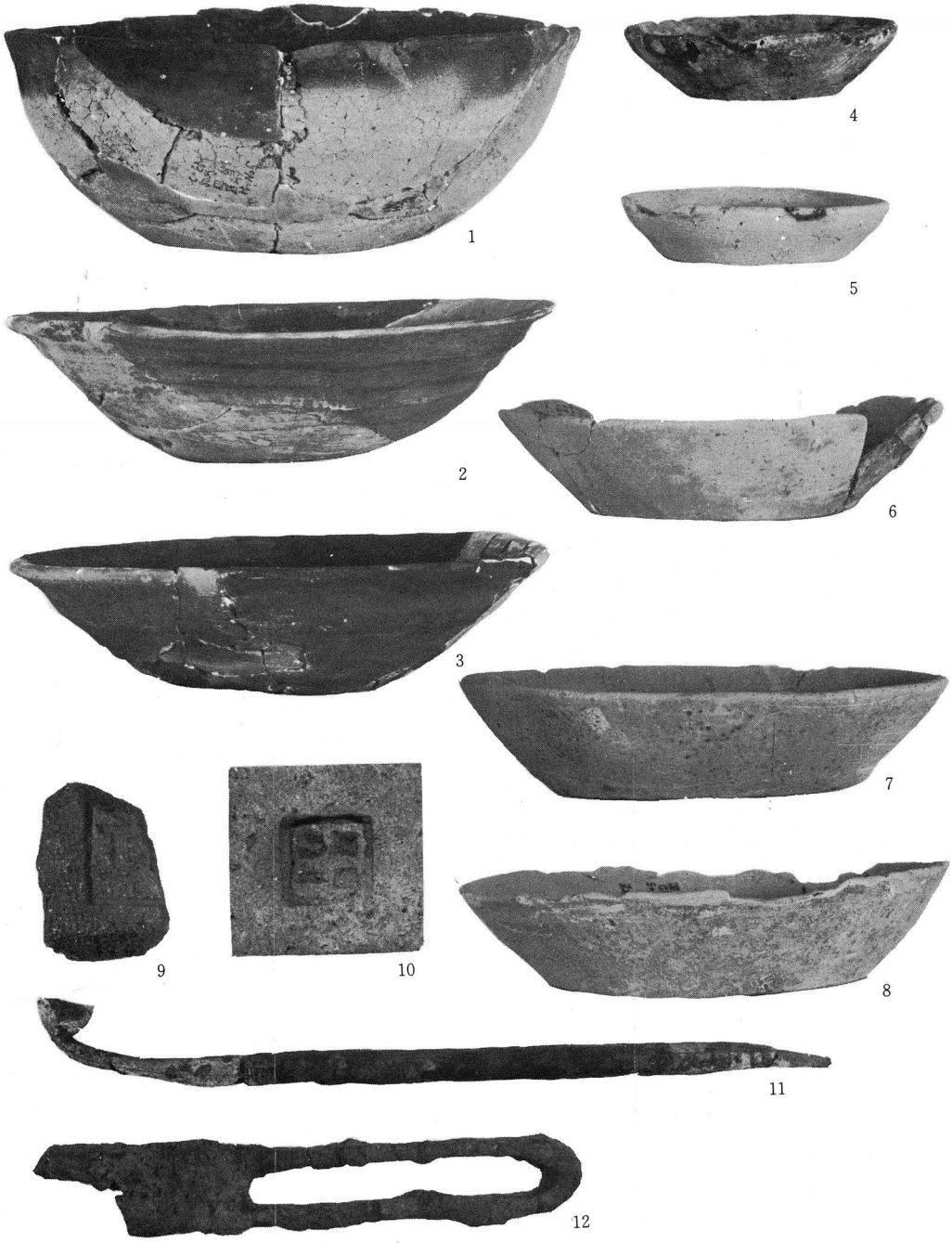
6

7

8

1．重弁蓮華文軒丸瓦（11図1）
2．重弁蓮華文軒丸瓦（11図2）
3．偏行唐草文軒平瓦（11図8）
4．重弧文軒平瓦　　（11図7）
5．宝相華文軒丸瓦　（11図4）
6．宝相華文軒丸瓦　（11図5）
7．連珠文軒平瓦　　（12図4）
8．変形華文軒丸瓦　（11図3）

出土遺物写真1



1．土師器坏　(13図２)
2．土師質の土器坏　(13図３)
3．土師質の土器坏　(13図５)
4．素焼き土器燈明皿(13図16)
5．素焼き土器燈明皿(13図17)
6．素焼き土器坏　(13図 9)
7．素焼き土器坏　(13図11)
8．素焼き土器坏　(13図14)
9．刻印瓦「真」(12図 6)
10．刻印瓦「田」(12図 5)
11．キセル　(13図21)
12．鋏　(13図19)

出土遺物写真２

職　員　録

社会教育課

課　長　永野昌一
主　幹　早坂春一

文化財管理係

係　長　鈴木昭三郎
主　査　鈴木高文
主　事　山口　宏
〃　渡辺洋一

文化財調査係

係長(兼)　早坂春一
教　諭　加藤正範
主　事　田中則和
〃　結城慎一
〃　柳沢みどり
教　諭　青沼一民
主　事　木村浩二
〃　篠原信彦
〃　佐藤　洋
〃　金森安孝
〃　佐藤甲二
〃　工藤哲司
〃　渡部弘美
〃　主浜光朗
〃　斎野裕彦
〃　吉岡恭平　(1月1日採用)
嘱　託　伊藤　清

仙台市文化財調査報告書刊行目録

第1集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年4月）
第2集　仙台城（昭和42年3月）
第3集　仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和35年3月）
第4集　史跡陸奥国分尼寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年3月）
第5集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年8月）
第6集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第7集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年3月）
第8集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年5月）
第9集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年3月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報（昭和51年3月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備調査概報（昭和51年3月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年3月）
第13集　南小泉遺跡一範囲確認調査報告書一（昭和53年3月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年3月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年3月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第2・3次）のあらまし（昭和54年3月）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年3月）
第18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年3月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年3月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年3月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅰ（昭和55年3月）
第22集　経ケ峯（昭和55年3月）
第23集　年　報　Ⅰ（昭和55年3月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年8月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備調査概報（昭和56年3月）
第27集　史跡陸奥国分寺跡昭和55年度環境整備調査概報
東門跡（昭和56年3月）

仙台市文化財調査報告書第27集

和和55年度

史跡陸奥国分寺跡

昭和55年度環境整備予備調査概報

昭和56年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市国分町3－7－1
仙台市教育委員会社会教育課

印刷　株式会社　東北プリント
仙台市立町24－24　TEL 63－1166

文化財愛護シンボルマーク